

## アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

### 今回扱うアニメ作品：シン エヴァンゲリオン 劇場版

その2

今回のテーマ

シンジの心の喪失と再生について考えていく

前回のおさらい

エヴァンゲリオン Q においては、破でシンジが経験してきた相次ぐ喪失（思春期の喪失感情と結びつくもの）による心の痛みと悲哀が再び回帰し、シンジ自身が現実と向き合い、苦悩し、もがき続ける様が描かれている。

シンジは、喪失感に押しつぶされそうになりながら、心の支えとなる存在を求めていた。しかし、これまでに彼が出会ってきた人々 - ミサト、アスカ、そして綾波でさえ - 誰一人として彼の心を理解し、共感してくれる人はいなかった。その結果、シンジは深い孤独と疎外感に苛まれていた。（妄想分裂ポジションの心性）。

孤独を感じていたシンジは、カヲルと呼ばれる謎の少年と出会い、ピアノの連弾を通じて心を通わせ、彼に心を開いていく。

カヲルと関わる中で、シンジは現実世界を知ろうという思いが強くなり、一緒に街の様子を見に行く。しかし、そこに広がる想像を絶する、破壊され尽くした光景にシンジは言葉を失ってしまう。シンジ自身がニアサードインパクトを引き起こしたことをカヲルに静かに告げられ、シンジは取り乱し、再び心を閉ざしてしまう。

その後、カヲルの提案でエヴァと一緒に乗り、槍を抜くことになったが、その提案は、カヲルがシンジの自己愛的な殻を破り、他責的で迫害的な妄想分裂ポジションの心性から、自責的で贖罪を伴う抑うつポジションへと向かわせ、シンジの心を救い出そうとする試みのように感じられる。しかし、シンジはカヲルを理想の対象として捉え、躁的防衛を取ることで、かえって妄想分裂ポジションの心性を強化していく。

その結果、シンジは槍を引き抜くことで、フォースインパクトの引き金をひいてしまう。世界が崩壊していく様を目の当たりにし、シンジは自分が、万能空想のなかで起こしてしまったこと、これまで述べてきた様に妄想分裂ポジションの

中にとどまり、槍を引き抜いてしまったが、そこでようやく自分の犯した過ちに気がつき、そのことに加えカヲルというそのとき無二の親友をも喪失してしまう。その現実を直面し苦悩してしまう。

前回、妄想分裂ポジションについて再び説明した。

クラインの考える乳児の心性を改めて伝えと、生まれたばかりの乳児は栄養を与えてくれる乳房と一体となっている幻想を抱き（それを良い乳房ととらえる）、それ以外のものを悪いものと捉え、良いものと悪いものを分割して捉え、乳房がない時に無いとは受け入れられず、悪い乳房がやってくると捉える。それが妄想分裂ポジションの心性だが、母（養育者）に抱えられる中で、徐々に現実を受け入れるようになり、良い乳房も悪い乳房も同一であるという事実を直面し、自身は良い乳房と一体ではないということに喪失感を、そして悪い乳房と捉え、自身が容赦ない攻撃をし続けてきたことに強い罪悪感を強く感じる（抑うつ不安）といわれる。（クラインは、「愛する対象の喪失は、離乳期に最高潮に達する」と述べている。）そこから妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移

行が行われていくことになるが、その中で生じる、無価値感、絶望感や悲嘆の念  
が強く、自身の心の中に受け止めきれないと再び妄想分裂ポジションへと退行  
してしまう。

この視点で Q の最後の部分を考えていくと、

シンジは槍を抜くという自分の犯してしまった過ちを痛感し、強い絶望感を抱き、カヲルにすがりつくが、カヲルも死んでしまい、あまりの強い喪失ゆえに（そのことに加え、カヲルは良い対象ではなく使徒（悪い対象ではない）だったこと）、受け止めきれず、自分では、どうすることもできない強い無力感を感じている。一方で自身が犯してしまった罪の意識も感じており、周囲を迫害的に捉え、再び退行していくこともできない。妄想分裂ポジションに戻ることも抑うつポジションに進むこともできない。どちらの心性にもいくことができず、シンジは絶望の中で身動きが取れず、なにか、もぬけの殻のような状態になってしまう。

今回のシン・エヴァンゲリオン 劇場版は、そうなったシンジの喪失に伴う心

の再生と成長を描いている様に感じられる。

そこでボウルビィの悲哀の心理過程を説明した。

### 悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

→シン・エヴァンゲリオン 劇場版（以下 シン・エヴァと略）の冒頭のシンジ

は③の段階にある様に感じられる。

ちなみに…Qで説明できなかったが

アスカ「ガキシンジ。助けてくれないんだ。私を。また自分の事ばかり。黙ってりゃ済むと思ってる」

このシーンは序の最後を彷彿とさせる。序ではシンジがエントリープラグの扉を開けて綾波を助けるが、Qのこの部分はシンジ自身がエントリープラグの中でうずくまり、アスカが扉を開ける。（この様に、以前のシーンと対照的なシーンがシン エヴァでは繰り返し描かれているように感じられる。）本当はアスカは、シンジに綾波と同じ様にして欲しかった思いがあるのでは？アスカ自身強がっているが、綾波を強く嫉妬し、心は弱く、孤独で寂しい。それゆえにシンジの思いを受け止められないでいる。でもシンジのことが好きであるからどうかしようとしている。そこがQの最後並びにシン エヴァの冒頭部のシンジが目覚める時までが描かれている。

2. シンジが目を覚ました時、周囲の状況はどのような反応であったか？

## (Qと同じテーマ)

シンジはアスカたちと一緒に赤い大地を彷徨っていたが、全身防護服姿の人たちに保護される。シンジが目を覚ますと犬は人に慣れた様子で嬉しそうに吠え、幼児は無邪気に好奇心を抱いてみている。そして白衣姿のトウジが心配した様に接し、周囲の人々もシンジを暖かく迎え入れる。

そして周囲の人たちトウジ、委員長、彼らの娘ツバメたちのやりとりは和やかで、アットホームな雰囲気がある。そこはQの冒頭部の鈴原サクラが未確認生物の様な対応をして、ミサトをはじめ周囲のWILLEの人たちの殺伐とした雰囲気とは対象的である。

そしてトウジの家では皆が食事を食べたり、お酒を飲んだり和気藹々(わきあいあい)としているが、シンジは部屋の片隅で、一人離れていた状態で両膝を抱えたままうずくまっている。しかし皆、シンジの存在に気にかけている。

→この点も対照的である。QではシンジがWILLEの人々と関わろうとしているが、「みそっかす」扱いをされ、孤立しているのに対して、シン・エヴァではシンジを暖かく迎え入れているのもかかわらずシンジは自ら距離をとって殻に

閉じこもっている。

その中でトウジの義父が怒り出す

義父「シンジ君！ 無口はいい。だが出された飯は食え。それが礼儀だ！」

トウジ「まあ、オヤジさん。無理に飯に誘ったワシもいかんかった。今日はそつとしとったってえや」

義父「しかしトウジ君。これだけ貴重な飯をもらって一口も食わんとは、失礼にも程がある。なあシンジ君！」

委員長「お父さん、ツバメが起きるわよ。さ、後片付けして、布団敷きましょ。

ほらあなた、そっくりさんと碓君の分も」

ケンスケ「いや、碓は俺が引き受けるよ。その方がよさそうだ」



## 【考察】

色々な点が Q と対比して描かれているように感じられる。どちらもシンジの孤立が描かれているが、Q では周囲が迫害的に描かれ、シンジが排除されている様に描かれているのに対して、シン・エヴァでは周囲はシンジに対して受容的だが、シンジ自ら距離をとり、孤立している様に描かれている。

ここで、Q からシン・エヴァに変わる過程でシンジの心性は妄想分裂ポジションの迫害不安から抑うつ不安に変化しているように感じられる。

妄想・分裂ポジションの迫害不安：外の誰か、何かしらの脅かし

→他者への恐怖であり、自身の内的な心の痛みではない 激しい崩壊の恐怖

抑うつ不安：悲哀、罪悪感、無価値、絶望、無力

→対象の喪失に伴う感情であり、対象喪失の事態に自分が関与した気づき

抑うつ不安が生じる背景には、自身の不完全さの感覚がある、それは自分の限界

を知る感覚であり、万能感、万能空想の放棄→そこに悲嘆、無価値観、絶望感が

生まれる。

この取り巻く世界をシンジの心の世界を投影したものと捉えたとき、迫害から受容に大きく変わっている。けれどもシンジは（自責の念や贖罪の念を抱き苦しみがいている）その中でどの様に振る舞えばいいのか解らず、閉じこもっている様に感じられる。

シン・エヴァにおけるシンジはその抑うつ感情に苛まれ、それゆえ、身動き取れなくなっている様に感じられる。しかし周囲の人々はシンジに対して受容的である。トウジの義父は怒り出すが、それは迎え入れようとしているにも関わらず反応しようとしなない怒りであり、Q の WILLE の人々の排除する感じとは違っている。そしてシンジ自身もこれまでと違って受容的であるという様に感じ初めているように感じられる。それはとりもなおさず、抑うつポジションへの過渡期の様にも感じられる。

以下のケンスケの言葉が象徴的である。

「意外だったろ。トウジと委員長が結婚したのは。中学のときはケンカばっかし

てたもんな。まあきっかけは、ニアサードインパクト。その後の苦労が二人の縁  
結びだ」

「碇、ニアサーも悪いことばかりじゃない」

## 1) シンジが覚醒後、アスカとの初めての対面 (Qと同じテーマ)

トウジの家庭の中に溶け込めないシンジをケンスケが引き取り、ケンスケ家に  
招かれ、シンジがその建物の中に入るとアスカが裸の姿で水を飲んでいて、

アスカ「ふん、私の裸よ。ちっとは赤面して感激したらどうなの？」

シンジは硬直したまま何も言わない。アスカは柄杓を水瓶の蓋に叩きつけて、  
吐き捨てるように言う。

アスカ「ったく！ ケンケンもこんな鬱陶しいヤツ拾ってきて物好きね」

ケンスケが裏口から戻った。アスカは仁王立ちで裸を隠そうともしない。

ケンスケ「ただいま。ああ、先客だ。しばらくうちにいると思う。諸事情あって

式波は村には顔を出せないんだ」

アスカ「別に、リリンが多くて鬱陶しいだけよ」

その時、シンジはアスカの首に巻かれた黒い帯に気づき、カヲルが亡くなった  
ときのことを思い出す。

シンジ「うっ！ うはっ、うええっ」

シンジはその場で嘔吐し、うずくまる。

アスカ「D S S チョーカーにだけ反応ありか」

アスカ「ケンケンそいつを甘やかし過ぎ。そんなの自分で拭かせなさいよ」

ケンスケ「碇は今、食べないし、自分から何もできない。よほど辛いことがあつ  
たんだろう」

ケンスケは、手を汚すことにも苦勞を見せない態度で、淡々とシンジが吐いた  
ものを拭いていく。

アスカ「そんなのいつものことじゃない。そうやって心を閉じて誰も見ない。こ  
いつの常套手段でしょ。放っときゃいいのよ。どうせ生きたくもないけど、死に  
たくもないってだけなんだから」

ケンスケ「碓、今はそれでいい。こうして再開したのも、何かの縁だ。好きなだけ頼ってくれ。友達だろ」

ケンスケ「俺は碓が生きていてくれて嬉しいよ」

### 【考察】

躁的防衛で再びインパクトを起こし、トウジ、ケンスケを始め、市井の人々は大変な被害を被ったが、Q と違って皆、シンジに対して非常に受容的である。

その中でシンジに激しい陰性感情をぶつけてきたのはアスカである。それは市井の人々の抱く怒りの代弁の様にも感じられる。しかしその思いをケンスケは暖かく包み込んでいる。その様は周囲の人々が愛と憎しみの葛藤を抱き、愛の中に憎しみの感情を収める心の動きが起きている様に感じられる。まさに抑うつポジションの心性が起きている。トウジ、ケンスケたちが大人の姿になって登場してくるのはなにか象徴的である（成熟の象徴）

一方で、シンジの視点で見たときに、これまでシンジは周囲に対して迫害的に感じており、心を閉ざしてきたものと考えられる。シンジが閉ざしていることは変わらないが（このシーンでは身体的にも身をかがめ殻に閉じこもっている）、

シンジに対して周囲の人々が思いやりの心を持って接している様に、シンジは感じているのではないかと考えられる。

シンジの外見状は変わらないが、心が変化している様にも感じられる。

ちなみにこのシーンも序でシンジが綾波の裸を目の当たりにし、赤面するシーンを彷彿とさせる。序では、シンジは綾波に心を開いたように描写されているが、ここではアスカに対して関心を示していない。さらに、DSS チョーカーに反応するのは、カヲルの喪失を受け入れられないことを示唆している。つまり、綾波とは異なり、アスカはシンジを変える存在になっていないことが明確であり、それはアスカにとって非常にショックだったと考えられる。

その後、綾波（そっくりさん）が市井の人々との関わりが描かれていく。

綾波をシンジの写し鏡と捉えたとき、それは今までとは違った、新しいものを取り入れ、再建の段階にシンジの心は進みつつあるのではないかと考えられる。

つまりその後の綾波の変化はシンジの心の変化を表している様に感じられる。

### 3. 綾波は市井の人々との関わりの中でどの様に変ったか？

シンジがうずくまって殻に閉じこもる一方で、綾波は市井の人々と関わり色々なことを素朴に尋ねていき、徐々に新たな発見をしていく。

1) 委員長（ヒカリ）が授乳をしているところで、綾波が色々尋ね、自分には授乳ができないことを知り困惑するシーン

綾波：分からない。綾波レイなら、どうするの？

委員長：あなたは、綾波さんとは違うんでしょ？ だったら、自分で思ったことをすればいいの

レイの瞳が見開かれた。今まで考えようとしなかった設問に、彼女はしばし無言になる。

綾波：違って、いいの？

2) 畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン 1

「風呂って不思議。LCLと違って、ポカポカする」

「私、命令がないのに生きてる。なぜ？」

3) 親子が、手を取り合う姿を見て綾波が問うシーン

綾波：あれは、なに？

委員長：そうね、仲良くなるためのおまじない

そう言うと委員長はそっと右手を差し出し、綾波は右手を、そこに重ねる。

4) 畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン 2

綾波：私の名前？

人々1：うん。いつまでも「そっくりさん」というわけにもいかんからねえ

人々2：先生の話やと、自分の名前を忘れとるそうやけど、じゃったら自分で新

しく付けたらどうなの

綾波：名前、付けていいの？



## 【考察】

綾波は色々な集落の人々に色々なことを尋ね、彼ら彼女らの言葉一つ一つに心揺さぶられていくが、それだけ彼女を取り巻く外界が新鮮に感じられ、新しい発見の連続であるかの様に描かれている。それは今まで受け身的（超自我に支配されていたともいうべきか？）であった綾波が徐々に主体的、能動的になり、積極的に外界の刺激を取り入れようとしている様に感じられる。1）から4）に抱えて時系列的に綾波の言動を列挙したが、分離个体化し、徐々に他者と関わりを持ち、自身に主体性が立ち上がっていく様を描いているように感じられる。とりわけ4）の名前をつけるということは自身のアイデンティを持つことであり、確固とした自我を持ち、主体性の立ち上がりを象徴している様に感じられる。

（cf 千と千尋の神隠し ）

そしてこの綾波の心の成長に関して、綾波とシンジを表裏一体と考えたとき、シンジの心の成長を描いているとも考えられる。また、綾波の心の成長の一方で、うずくまったシンジと一緒にいて、常に苛立ちを隠せないアスカのシーンは対照的である。

そして心が成熟した綾波とシンジが交流し、シンジに心の変化が生じる。